沼島又野島オノコロ島とも云ふ

萬葉集

朝凪に梶の音聞ゆみけつ國野島の海子の船にしあるらし

あかほりし野島は見せつ底深き阿古根の浦の珠ぞ拾はぬ

古事記曰、仁德天皇、欲見淡道島、而幸行之時、坐淡道島、遙望歌曰、

おしてるや、那爾波の崎よいでたちて、わがくにみれば、

阿波志摩淤能碁呂志摩阿遲摩佐の志摩もみゆ佐氣都志摩みゆ

新井君美

淡路島

萬歲幽宮閟、孤洲横水回、風雨天柱壯、煙霧海門開、樹色波間動、潮聲月裡來、蒼梧南狩後、落日望中哀、

又近江竹生島は古來注意せらしものにして、懷中抄に、

目にたてゝ誰か見ざらん竹生島波にうつろふ朱の玉垣

高積善

竹生島詩

靈島聞名遙寄懷、秋風尋到立徘徊、老松古柏相重插、怪石奇巖似欲頹、行雨終朝連水見、低雲溟暮抱山廻、有神此上幾年久、天下精誠任浪來、

春夜送人卜隱湖中　釋六如

東徑煙樹逗微月、一聽寒梅香初發、深淵三聲兩聲鳥、陰崖去年今年雪、聞說竹嶼卜隱居、煙水僅隔十里餘、湖上山中應相憶、漁笛雲聲共有無、

秋夕泛琵琶湖　梁田邦美

琵琶湖上白雲秋、蒼樹依微笙島幽、神女樓臺何處是、徒教明月照扁舟、

上竹生島　岡本黃石

雲衣影落古壇淨、金榜光飛深窟明、剩有天風吹不斷、琤々宛作步虛聲、

聞人將游湖中遙有此寄　齋藤拙堂

落木哀鴻湖上秋、輕舟覓勝向笙洲、煩君憑弔平公子、萬頃琵琶千古愁、

安藝倉橋島(一名長門島)

安藝國長門島　船泊磯邊、作歌五首(萬葉集)

我いのち奈我刀能之麻の小松原幾よを經てかかむさびたる、
磯のまゆ瀧津山河絶えずあらば又もあひ見むあきかたまけて

頼杏坪

春夜泊賀島

扇舟夢亦在煙霞、孤客隨鷗泊海涯、半夜雨來千樹露、三春濤映一洲花、
竹樓連社尋無主、樵徑漁汀見有家、此處無端發歸思、杜鵑啼斷月西斜、

小豆島

讃岐小豆島應神紀曰兄媛自大津發船而往吉備天皇居皇居高臺望兄媛之船以歌曰。
阿波泥辭麼、いやふたならび、阿豆枳辭麼、いやふたならび、誰がたされあらちし、吉備なる妹をあひ見つるもの

屋島

同國屋島は、殆舊態なきも、古人は

桂山彩巖

八島懷古

海門風浪怒難平、此地曾屯十萬兵、金鎖頻飛魚鼈窟、樓仙空保鳳凰城、
遍憐朱紱結纓死、無復青衣行酒生、不識英魂何處所、月明波上夜吹笙、
宮車一去帝王州、大海風雲寄晃旒、井底有緣還玉璽、水濱誰復問膠舟、
舞姫紈扇隨潮下、飛將彤弓學月流、那識寒煙衰草裡、幾人曾倚望鄉樓、

諸山八島

諸山八島

おもひぞ出る、壇の浦の、其船軍、今ははや、圓浮にかへる生死の、海山一同に靈動して、船よりは閃の聲、陸には波の楯、月にしらむは劒の光、うしほにうつるはかぶとの星の影、水や空、空行くもまた雲の波のうちあひ、ちしちがふる船軍のかけひき、うき沈むとせし程に、春の夜の浪よりあけて、かたきと見えしは、群れゐる鷗、閃の聲と聞えしは、浦風なりけり、高松の浦風なりけり、高松のあさ嵐とぞなりにける。

とあるが如く、源平の古戰場として、古來名ある上に、かくも美形をなせるために、詩題としても名ありしなり。

伯方島

伊豫伯方島、過鼻扶瀨戸

能隆

怒濤號々響似雷、孤篷搖動夢魂摧、海容忽挾岸相逼、帆影斜移路自開、
遠樹皆如負舟走、前山直欲壓人來、須臾不出渺茫外、萬里長風意快哉、

岩城島

岩城島(夫木集)　洞院左衞門督

伊豫の海岩城の島は吾なれや逢ふことかたき鹽のみぞやく

怒和島

同國怒和島、　五言　恥庵

燈洋馬鮫網、三津鰯魚船、漁人得意甚、牢晴四月天、

沖の島

土佐國沖の島(一名妹兄島)

妹兄の物語

今昔物語に云、土佐國妹兄行住不知島語曰、今昔土佐國幡多郡に住する下衆ありけり、己が住浦にはあらず、他の浦に田を作るに、食物より始て稻苗馬齒辛鋤鍬鎌斧鐇など云物に至るまで、家の具一所に船に取入、十四五歳許有男子、其が弟に十二三歳許有女とを船に守り目に置て、父母は殖女雇乘んとて陸に登りにけり、白地と思て船をば少し引居て、綱をば棄て置たりけるに、此二人の童は船底に寄伏たりけるが、其間に鹽滿にければ、舟は浮たりけるを、放つ風に少し吹被出たりける程に、澳に出にければ、其時童驚て泣惑へども可爲樣もなくて、唯被吹て行けり、童部恐々陸に下つて船を繫ぎて見れば、敢て人なし、二人泣居たれどもかひなし、然りとて命を可棄にあらず、此食物の有む限こそ、少しづゝも食て命を助けめ、此が畢竟なむ後は如何にしてか命は可生、然れば去來此苗の未だ乾かざる前に殖んとて、水の有たる所の田に作るべきを求出して、有ける限皆殖てけり、然して斧鐇などありければ、木伐て菴など造て居たりけるに、生物の木實時に隨て多かりければ、其を取食ひつゝ明し暮す程に、秋にもなりにけり、可然にや有けむ、作たる田絲能出來たりければ、多く苅置て、妹兄過す程に、漸く年來になりたれば、然りとて可有事に非ねば、妹兄夫婦になりぬ、然て年來を經程に、男子女子數產次けて、其れを亦夫婦となしつゝ、大なる島なりければ、田多く作り弘げてぞ、子今有ける土佐の國の南の沖に、妹兄の島とて有とぞ、人語りし、此を思ふに、前生の宿世に依てこそは、其島にも行往、妹兄も夫婦ともなりけめとなむ、語り傳へけるとなりとあるは面白し。

志賀島

筑前の志賀島(鹿島)

至筑前館遙望本鄕悽愴作歌　萬葉集、

之賀のあまの一日もおちず燒鹽の辛き戀をも吾はするかも然の海部の磯に苅干す名のり藻の名はのりてしをいかでわひかたき荒雄等が行にし日より志賀のあまの大浦田沼はさぶしからずや大船に小船ひき副ひかつぐとも志賀の荒雄にかつぎわはめやも、

大宰太監大伴宿禰百代等。贈驛使歌

草枕旅行く君をうるはしみたくひてぞ來し四鹿の濱べを

志賀の山いたくな伐りそ荒雄等がよすがの山と見つゝしぬばむ

之可の浦に漁りする海人明暮は恨みこぐらしかぢの音聞ゆ

五岳

平戸島

遊志賀島

波濤萬里接尊前、也學長鯨吸百川、欲舉一杯醇醪予、鵬雲低認是朝鮮、

高橋煙波

平壺島（肥前平戸島）

雷奔電擊浪難平、出沒青山不識名、且喜海城看漸近、隔林墻壁轉分明、

五島

五島中に知訶島あり、重之集に、

名をたのみ近のしまべを漕來れば今日も舟路に暮てゐし哉

白雲のかゝれる峯を見渡せばちかの島にはわらぬなるべし

藤原家隆

松島

もろこしも近の浦わの夜の夢思はぬ方に遠つ舟人

陸前松島は、其景天下に知らるゝものなれば、行客騷人の詩歌多かる中に、

松島詩

大槻磐溪

煙波三萬六千頃、羅列二百九十峯、天造地設神異境、巨靈何年費鐫鑱、

夜月往々聞天樂、彷彿雲中奏英咸、我放輕舟向其際、一葦怒風去飄々、

沂洄過盡千家浦、十里水程帶潮鹹、籬島以外漸空闊、海燕群佛語呢喃、

忽有島嶼來莽會、粉如萬馬脫轡銜、船頭相迎船尾送、看他姿態盡神馴、

怒者金剛笑者佛、天女凌波曳藍衫、鶴張翼兮龜曝背、躍春蛙而走秋鼙、

鳥帽傾兮黃冠側、鎧乎鏘乎太森嚴、無樹不松皆蟠屈、長蓋含風翠絨摻、

一島獨見猗々綠、幾叢脩竹寒烟緘、右盼左顧不遑記、驚聞鐘聲出瑞巖、

松島景

渚宮屹然占勝概、樓船有時飄風繆、
捨舟更攀富春嶺、空翠濕衣入檜杉、
喜見雛僧來導我、輕趨走險徒於漸、
雲際乍見大仰寺、天門咫尺劒可棧、
上界自有高僧住、烟霞供養任老饑、
爲是蒙密遮遠目、高樹之嶺一掃芟、
豁然縱眺俯溟渤、天風吹髮髮影々、
萬點青螺聚一瞰、高峰當面猴群出、
白波浩渺魚龍躍、葉大漁艇散千帆、
白沙橫斷十餘里、遙見蜑丁拾海蜆、
連山斷處金華出、倚天峭壁青巉々、
俯仰之間白日盡、萬象藏形忽黯澹、
須臾大月劈波浪、一團明月開寶函、

我願立碑最高頂、漫把天橋嚴島比、直將特筆雪冤讒、仙眞窟宅何足說、
大東百神所臨監、區々瀛洲蓬萊島、唯算水俗與山凡、

佐渡島(壬二集)　藤原家隆

佐渡の海や吹き來る風の方もうしながむる袖に落つる涙か　松尾芭蕉

荒海や佐渡に横ふ天の川　寶井其角

罪なくて配所の月や佐渡生れ　吉井雲鈴

七合に帆かげも涼し海の上　尾崎紅葉

來いと云ふ人あれ島は涼み時　伊藤松宇

いなづまの一筋射るや佐渡が島

千歳よし歌の帝のおまし所黄金垣ゆふ佐渡が島山　與謝野鐵幹

山近く見ゆとう聲に船ゐひの小女もおきて亂髪すく渡邊湖畔

富小路侍從を送る、　岸田吟香

大君の勅かしこみ來いといふたとて往かれやうかといふ佐渡へ行く君

島似蓬萊島、　人如太古人、　山無狼蟒害、　海有介鱗珍、　土沃多收穀、
鑛良富採銀、　不勞衣食足、　卽是葛天民、

福田鳴鵞

松杉翠帶蜃家煙、　初月臨灣暮景研、　望盡層濤千萬里、　滿洲蒙古在何邊、

柳原前光

君云來矣我將往、　卅九海程雲水深、　舟有櫓兮仍有楫、　佐州之土自古生金、

森春濤

よしと云ふ吉野の春も如かじかしこゝは黄金の花の國なり

藏田茂樹

佐渡こそは廻りの海の幸の外に黄金の米もみてる國なり

藏田・重時

嚴島宮島

嚴島は一に宮島といふ、

宮島

菅茶山

彩舟銜尾倚江沙、　隱映仙山五色霞、　壖內潮回廊九曲、　街頭鹿狎市千家、
諸平威焰悲黄土、　二帝宸遊想翠華、　懷古何人同此意、　四隣歌吹徹宵譁、

題嚴島眞景、　爲藝府賴文學、

柴野栗山

黄玉表浸碧海浪、　金榜御題射蒼穹、　君不見、　神人鋸斷須彌半、
移而置之蓬萊東、　變幻萬狀搖未定、　翩若彩雲泛春空、　中樓靈妃市杵姬、
紫貝之闕水晶宮、　君臣遭遇其所掌、　香花奔頭傾萬衆、　余亦乘夢嘗一到、
珊瑚寶鞭策白龍、　僊鹿神鴉相後先、　延條飛度百尺虹、　礬屏廊廡迷初覺、
百八珠燈波底紅、　寅夜始達瑤階下、　仰欵天閶門倥偬、　囚逆不臣平相國、
義弘元就底蟻螻、　不知神明何所眷、　福祐擁護如奸隆、　余有神策萬餘言、
一言而可以興邦、　東說西說舌已爛、　君相不省褒如聾、　衰朽寒餓非所願、
報國思効涓埃忠、　聰明正直如不昧、　回首一爲照丹衷、　銀纓長刀今安在、
何惜暫時借禿翁、　哀籟千聲寂不答、　怳然骨慄躁胸中、　賴家眞圖誰處得、
一々與夢所見同、　對之猶疑魂未返、　如聞空樂裊曉風、

みつしほに月より上の宮居かな
宮島や燈籠の火にあけやすし
燈籠やいつくしまやまなみの花

又、幽齋紀行に曰く、

遠島の下津岩根の宮柱波の上より立かとぞ見る

又、南谿子の東遊記に曰く、松島の狀を記して、

（前略）岸より幾に五六丁の所に小き島あり、辨天島と云ふ、夫より十八町にして、かの名だたる籬が島あり、右の方に東宮濱と云ふ里あり、向うの沖の切戸の出崎を湯ヶ崎と云ひ、左の方を崎山と云ふ、皆漁家なり、籬が島より左に折れて、舟の頭北に向ふ、東の方に島々連なれり、大なる島近く隔りて、其島の切戸より東海を見る、其大なる島より外にある島々、我が舟の過ぐるに從うて北よりして南に移る、小さき切戸より數々の島々を繰り出す事、覗き機關（カラクリ）を見るごとく、又芝居抔の引道具を見るが如し、其島皆甚だ大ならずして、色々の形あり、多くは皆其形を以て島の名とす、地藏島、烏帽子島等は、其形尤もよく似たり、其外（島名略）猶此外に船頭色々の色をさして數へしかど、書きしるす間に船行過ぎて、四方の景色を見洩らさじとするに、心の遑なくして十分の一もしるし得ず、八百八島有りと云ふ、誠に數百に餘れりと思ふ、鹽竈の子賀の浦より、松島まで二里半の間、泉水のごとく、海また深からず、五六尺或ひは七八尺計りに見えて、底甚だ明なり、かくの如く島の間皆入り海なれば、風ありと云へども、波立つことなしと云へり、此の島々の松皆赤色にして、枝皆下にたれ、作れる松のごとし、故に其景色艶美にして猛からず、さて舟を雄島に著けて、上より見るに、雄島頗る大なり、此島は見佛禪師の座禪の地なり、其堂宇今に連なれり、島の南の邊りに高さ一丈に餘れる碑有り、元の僧雪一山鎌倉建長寺に住持せし時、見佛禪師のために書する碑にして、字體は草書なり、苔封じて文字見えがたき所多し、世人の石摺にして珍重する石碑なり、此の外此の雄島には、芭蕉の朝な夕の吟をはじめ、俳諧者流の發句の碑、或ひは、騷人の詩碑等甚だ多し、然れども此佳景に對す

べき作有りぬとも覺えず、さて雄島見廻りて大なる橋を渡り、他の島に登り、又其島より橋にて松島に渡る、今松島と名付くる所は、陸地にて町家軒を並べたり、多くは皆旅館なり、松島の町は耕作の地少ければ、農人にもあらず、又此地は瑞巖寺の下にて、殺生禁制の所なれば、漁獵の者にもあらず、他の街道にあらざれば、商家にもあらず、大方は唯松島の景色遊覽の人を宿して渡世とすることなり、瑞巖寺は町の西北にあり、禪宗にて大地なり、開山は世に名高き眞壁平四郎入道なり、此松島の町よりは、景色見えがたし、景色はたゞ舟行の間なり、さて兼て仙臺の人の云ひしには松島に遊ぶ人は、必ず富山に登るべし、松島の景は富山に留まれりときゝしによりて、又富山に至る、東北にあたりて其道五十丁ありて、此邊にては第一の高山なり、此山の絶頂の南邊に富春山大仰寺といふ時あり、此寺の書院の庭より、東南の方を見れば、松島の全景一望の中に備はる、大抵東西二三里に、南北六七里許りとも見えて、八百八島連なれる風景、畫に書ける西湖の圖に甚だ似たり、遙かに眼を轉らせば、東洋限りもなく、誠に天下第一の絶景、筆紙に盡すべきにあらず、人によりて松島は絶景なりと云ふも、あまり奇麗にして畫圖の如き故にいふなるべし、余既に天下を廻り盡して、名勝の地至らざる所もなきに、實に此の松島の風景に比すべきもの、又他所に見ることなし、此庭に一生をも終えたき心地すれど、千里外の旅の身、さてあるべきにあらねば、親しき人に別るゝ心地して、寺を下り、又松島にかへり云々。

かくの如くに、過去に於ける島文學の少なかりしは、大に遺憾とする所なれども、今や北千島樺太の島より、南は太平洋中の島に及び、更に臺灣諸島に及べる日本文化は、海洋を以て陸に代へ、海島を利用すること多きと共に、島嶼に關する文學多かるべきなり。

三、島と人性、尾崎紅葉の煙霞療養中の一節に、佐渡を評して、新潟から渡つて來て意外の想有るのは言語である、此の島でありながら、都會の新潟の如き强き訛が無く、又其に似たる處もなくて、多く京辨を雜へる、之れに就ては古來の配所として雲の上人の頻々入込む事の有つた爲に、自ら其人を崇拜し、其語を

模倣したのが侵漸して、今日の方言をなす土臺を作つたのと、又一面には夙に京大阪への海路が開けて居たのも、都言葉を齎す道であつた所から、其力も與つて、内外から學んだのである、と人の説くのを聞いた云々。

又、幸田露伴は、易心後語中に、同じ佐渡を評して、

佐渡は概して孤島の常とは云ひながら風俗輕薄ならず、人に活氣の乏しき代り狡黠のもの殆どなく、性質鈍なる我等にはいと好もしく思はれて、我若しいよいよ世を厭はゞ木曾路の中か此島の中かに潜み遁れむと知れぬ、未來を測るはどなり。となり。

英米人の相違

吾人は先に泰西に於て、略其血液同じき所の二國民を比し、英米兩國民の特性を知るに及びて、一種の疑念を生じたることあり、ロンドン市中に於て、土一升は金一升にも超ゆる屈竟の地に於て、英蘭銀行が、依然舊態を保ちて、十七世紀末に建造せる建築物が、著然として立てるをきゝ、更に此大銀行が、世界經濟界の重鎮なるを思うて、英國民の性行を疑へることあり、英國民が進取發展は、政治にも、實業にも其他あらゆる方面に於て明かに認めらるゝを、今此保守的行爲を敢てするものは、之が因なしと云ふべからず、西方に於て後進の新開國たる米國が、日進月歩の半時も休まざる改新をなせるも、その一因は廣大なる領土は、發展の餘地極めて多く、大事業大計畫を企つるもの多く、舊式打破は其主義なればなり、かの銀行が二百餘年に亘りて、其平屋作りの建築に改造を加へざるものは、米國の廣大に似もよらざる小島國なるによりてなり、東方新帝國國民は、自ら稱して進取的國民と云ふも、日本式木造家屋を見て、吾人は自ら怪疑なき能はざりしことあり、吾が災害史を繙きて、古來日本國民の蒙れる、震災火災の二者を見るに、災害決して輕からざるに、日本國民は此二災を蒙ることは最も甚しき木造家屋につきて、何等の改造をも施さゞりしと相似たり、たゞに此一事にとゞまらず、英國民が幾多の方面に於て、常に保守的傾向のあらはるるは皆之れ島國の影響なりと云ふべく、また英國人が家庭の和睦なることも、よく大人物を崇敬して之に大事を委して疑はず、よく異材をして其能を發揮

英國民と日本人の保守的傾向

せしむるが如き、米國民と著しき相違にして、米國が常に多數を恃みて輿論を重んじ、遂に一般に智能識見の低度なる輿論によりて、問題を決せるため、遂に輿論は愚論なりとの譏あると趣を異にせり、英國憲法は、其制定の事情、日本憲法發布の如き圓滿なるものにあらざりしも、長年月の間に發育を遂げて、世界無比の憲法となれるものなるが、政治上の問題に、習慣を重んじ、前例を尊び、萬止むを得ざるの後辛うじて改革を加ふるに過ぎざれば、時代によりて急激の變化を來し、旨目的行動をなすなく、着實穩健にして、不文律の勢力大なれば、繁文褥禮の煩もなく、形式外形のみを論じて曲解に陷ることもなく、保守的なれども、よく中庸を失はざることは、英國民の誇りと稱すべく、米國に共和制發達し、英國の帝政鞏固たるも、皆其周圍より蒙れる影響と云ふべく、英國民が過去を重んじ、日本國民が歴史を重んずるに對して、米國民が主として現在を重んずるもまた之が因なり。

島國と統一政治

海島によれるものは、勢一統治者の下に集合して、よく自全の計をなすは、かの船舶航海にあたりて、其危險測るべからざるものなるや、たとへ船長たるもの年少無經驗なる場合にも、よく老練の水夫を統一して、一船艇の安否を荷へるが如く、たとへ時に賢良ならざるものありとも、之がために自全を危うせざる限は、決して不良を企てざるなり、島帝國が一統治者を中心として、よく海外に對して自全をなすを見るに、日本の歴史にも亦英國史にも見る所にして、元の日本に寇せし時、ナポレオンの英國を害せんとせし時、東西の二島國民の考へし所は皆一なり、國君と人民が互に相愛して、上には、民の富めるは朕の富めるなりと仰せらるゝ天皇あれば、一身を捧げて忠君の犧牲となれるものあり、君臣一體の美しき有樣は之を外邦に見るべからず、誰人か猿猴の態をなして、よく其本體を究めずして、天皇は機關なりとの愚說をなし、民を迷はし國を危うせんとする、ましてや同じく島國なるも、日英兩國は其地形に於ての類似あるも、其國史には著しき差あるをや、日本國民の團結心や、又愛國心の研究に至りては、之をかの輕薄なる洋行者流に學ぶを得ざるなり。

浦島子と國民性

浦島子の一話は、もと架空の說なるも、會吾人は之を以て我國民性の特長を窺ふに足らむ、かの龍宮は、金銀珠玉の山積せる所なり、氣候は四時を閲して皆人體に適するもの、甘味美羹は意の欲するまゝに、輕羅錦繡また欲するまゝなり、美妓を配とし、醇を汲み銘をむすび、目は秀麗に、耳は歡樂清音に、口は甘美に充たされたるも、浦島子は心に飢ゑたるものなりしなり、美ならざるも、故郷の土をなつかしく思へるなり、遂に美地を擲つて去れるは、愛郷心たるべく愛國心たるべし、かの海外渡航者が、中道にして歸國するは、勇なきに似たり、之れ吾國民の一弱點にして、又其長所たるを失はざるなり、之を古にしては、阿倍仲麿の三笠の山の月に泣けるあり、之を邊土にしては、南鳥島の土人が、安全なる內地を嫌うて、噴火一度中止するの日、危險多き故郷に歸れるにあらずや、龍宮の美にして壯なる、かくの如しとせば、其龍宮より劣れるものをや。

島國人と愛國

島國人は愛國の念に富めるも、同時に其胸度の大ならざる失あり、かの島嶼につきて檢するに、かの河流の條に既說せるが如く、小なる領土には大河なく、洋洋たる大河なく、又清濁併せ呑みて後混々として海に朝するものなく、此河畔に人となりしものが、性情の潔癖にして、汚濁を嫌ふこと著しく、ために少しく汚行失點ある人を嫌ふこと甚だしく、遂に大人物のよく清濁併呑の大業を樹立するものなく、こゝに島國人として狹量なる小人物を生むに至る、其信念の强固なること、主義あり主張あり、儼然卓立せること、實に愛すべく敬すべき所なるも、此等の性行は或一面の活動に適するも、遂に各方面に亘れる成功を期しがたし、近來日本一部の識者が大に見る所ありてか、盛に成功の祕訣として、圓滑溫良なることを勸め、よく世と共に流るゝの術を敎ふるものあれど、心に所信もなく信條もなくて、徒に世に容れられんことを努むる輩が、虎を描きて猫たるものとなり、かの八方主義となり、小才子御上手となり、主義を棄て主張を拋ち、己の全を舉げて世俗に投じ顧ざるものあり、世上の事かくの如くならざるものは遂に立ちがたきか、吾人は識者の憂を尤とするも、また吾國の世態に對して憂慮なき能はず。

また島國人は一般に冒險の思想に富めるが如し、かの英國が盛に海外に發展せるも之なり、四面環海の邦土に於ては、海と親しむこと多く、海洋を見るも惧となさず、また舟筏の利用巧妙にして、遂に海外に發展を試むるに至れり、大和民族また島國人として、此氣宇なきにあらざりしも、爲政者がなせる退嬰主義が、一方にはよく國本を危うせざりしも、他面にはまた海外發展の途を壅塞し、原田孫七郎あり、山田長政あり、間宮林藏あり、林子平近藤重藏小笠原貞頼の徒あるあれども、或は其事中道に沮喪し、又意外の故障に遭遇し、政治の干渉あり、よく其大業を成就せるものなく、明治に至りて、郡司成忠氏の千島に向へるもの、白瀬嘉氏の南洋に航せしごとき、其志は壯なりしも、其費に窮して孤堂嗚らしがたきの歎をなさしめ、僅に發芽したる國民の氣象は、幾度か打擊を蒙り、島國人としての弱點のみ保留せるが如し、之れ今後の國民教育者たるものゝ、最留意せざるべからざる所なり。

晋探險者長政、林藏、貞頼、重藏、郡司、白瀬

島の利用厚生

四島の利用厚生

日本英國の二帝國が、海上の群島によりて、其武力を以て世界に雄飛せること、今更新に論ずべき所にあらざるべく、此等二國が比較的大面積を有して、時に大陸の狀を呈するものあれば、余が所謂島としての功を述ぶるを止め、更に小なる海島につきて、其の利用厚生の功を考ふるに、航海上より見たる日本英國の重要なる位置を占むるにつぎて、小面積なれども、重要なるものは、東洋に於て香港を推さゞるべからず、たゞに英國の東洋貿易場たるのみならず、對岸支那にとりても、必須の貿易場たり、又今後大なる發展を見るべきは、膠州灣に於ける青島なるべく、勃々たる獨逸皇帝の野心と、進取瞬時もとゞまるなき獨逸國民の努力が、東洋に於ける發展は刮目して見ざるべからざる所、また過去のものとして今日に昔日の狀を殘しがたき澳門島あり、少く南して新嘉坡が交通上の要地たる狀を見るに、南印度南極洋に對し、東は太平洋を控え、遠く大西洋に對するセイロンの要地たる、地中海中のマルタ島、カナリー、ケープベルデ、アセンション、セントヘレナの大西洋に於ける、ハワイの大平洋の中心たる、皆島嶼が寄航地として重要の位置を占めしものにして、貿易

香港

青島

島嶼の氣候

海運業にとりては、最重要の地たり。

又島嶼の氣候は海洋的氣候として、最良候なるものなれば、氣候穩和なること勿論にして、熱帶地方も、亦寒帶も、著しき温度の差異を認めがたきものにして、内地に於ては生物の生存の困難なる地方も、島嶼に於ては比較穩和なるため、生物各其所を得、從て人類の棲息地としても良好なるものなり、また温帶地方の島嶼の如きは、病疾療養の好位置を占め、日本に於ては伊豆大島に渡り、又淡路島に赴きて療病するものあり、これ海岸の地方大磯逗子葉山熱海伊豆山伊東須磨濱寺等に比して、交通上の不便はあれども、單に氣候の上より見んか、好適地と云ふを得べく、大西洋のベルムダの如きも、また之なるべし、氣候の穩和なると適當の降雨あること、島にとりては大なる恩惠と云ふべし。

島は產業より見て重要なるものあれども、之は大陸と同樣にして、たゞ良氣候なるため、内地より產額多き位にとゞまるもの、世界の島嶼極めて多く、產業上の要地たるは勿論なれども、特に島として注意すべきこと多からず、たゞ日英

島は退隱地

二國が、交通上の要衝を占め、之によりて工業を盛にし、又從て商業航運を發達せしむることとあり、從島嶼は、或は天產地として、又工業地として、產業上に注意すべき事項多く、氣候の良好なるために、不良の地少く、不毛の地なければ天產も多かるべく、天產多ければ、人々もまた次第に多かるべく、加之其住民は、日英兩國の如き特性ある國民として、海外に發展し、海上に雄飛するものなるを思へば、島嶼はあらゆる方面より吾人の注意を拂ふべきもの多し。

五、島は退隱の地　島は一面に於ては、退隱の地たり、かの金城鐵壁を以て、壘を高うし濠を深くして、よく籠城の術を遂ぐるものと同じ、彼海上の交通不便なりし時に於ては、最もよく此術をあげ得たり、元寇の大軍が、非常なる勢力を以て來り侵せる時、對馬壹岐は先づ此の術にありて、海を以て壘にも濠にも代へたるが、衆寡遂に利なく、元軍の蹂躪に委したるも、島民が退隱的防禦をなせること事實なり、保元の亂の爲朝はよく流謫を利して、大島に退隱し、又後日琉球によれりと稱せらる、平氏の一谷を遁れて屋島によれるも之なり、敵若し强か

らんには、進んで之にあたるを避け、徐に自營の途を講じ、敵軍弱からん時には、鋭鋒を以て之を追はんためには恰も城郭の用をなせるものなり、流謫所として又更に退隱地たる島嶼は、隱岐佐渡の如き類あり、後鳥羽順德二帝は不幸にして退隱に終りたるも、後醍醐帝は更に進んで船上山により、京にかへり給うて、北條氏を滅すに至れり、源義經が蝦夷に退隱せりとなせる說も、或はナポレオンの一度エルヴァに流人となり、暫く茲に勢力を養ひ、機熟するや起つて捲土重來の業をなせるなり、最後のセントヘレナは空しく英雄埋骨の地たるも、其退隱的狀態は一なり、南洲西鄕先生が、大島三左衞門を自稱せしを思ひ、明の遺臣にして忠烈の臣たる鄭成功が、厦門の前面なる金門島によれるも、或は臺灣によれるも、皆之ならざるはなし。

ナポレオン南洲の流罪

鄭成功

六島の成生　火山は陸地表面にあらはるゝ高山脈にのみ噴出するものにあらず、一見一の高低なき同深と目せらるゝ海洋底に於ても、其高低參差一ならざること前述の如く、すでに海底には海底山脈あり、若し現在の海水にして、其

島の成生

高さを減ずる數百數千尺ならんには、新なる陸地は各所にあらはれ、海底忽ち陸地となり、海底に於て、僅に水面下に影を隱めし海底山脈は、倏忽として其本體をあらはすに至らん、此等山脈をとりて、其成生を檢せんか、之また陸上に於けるが如き狀態を見るを得む、峻にして銳なるものゝ大部分は、火山力によるものにして、現在海水上にある火山島と其性質を一にせるものなり、即ち太平洋に於ては、日本群島附近より、馬來諸島を經て、南大洋洲の東北方より東南端に至る、栗散棊布せる諸島あり、又東布哇に至る迄にも幾多海島のあるあり、或は印度洋にも、地中海にも、又大西洋にも、其數決して少からず、日本群島は其全を擧げて火山島と稱しがたきも、地質圖をとりて、大陸成生の狀を察するに、其最廣大なる面積は、火山岩に屬するものなるを見ても、或る意味に於ける火山島と稱すべきか、北千島の大部分、伊豆諸島小笠原島、薩南諸島琉球の如き、火山島よりなるもの極めて多く、日本群島は數に於て、火山島の他にまされるものと云ふべし、馬來諸島を通過して、日本より南極に及べる、太平洋西部の大火山

火山島

帶は、火山島を生むこと最も多く、其他、大西洋地中海にも、火山帶に屬する島嶼多く、今も明かに其成生を說明し得べき、噴火の狀態を繼續するものあり、また海底火山として、地盤の變化を受けて、後日火山島たらんとするものあり。

三角洲島

又かの大河流の下流につきて、其河口の狀を觀るに、河口太く開いて、巨船舶の上下に便ある喇叭狀のものあり、また河口單一なる一條の河流にあらずして、河水が横に、其建設作用をなせるものあり、之れ河流の條にも述べたる所にして、河水が上中流より伴ひ來れる泥土砂石の類をば、其運搬力の減少と共に、遞に河口附近に遺失し、年々歲々此行動を繰り返してやまず、河口はいやが上にも泥土の堆積をなして、こゝに島嶼を形成するものあり、其形狀一ならざれども、悉く之を三角洲と稱す、此等の島嶼は極めて低平なるものにして、土地又多くは菅腴にして、耕耘の上にも、或は都市の建設所としても、極めて有用なるものなり。

海流島

或は海流の勢力によりてなれる島嶼あり、海流が河水の如き運搬力を有し、其流向の轉じ、又其勢力を失うて、其抱有物を失することありて、之が堆積になるものあれども、明かなるものは、二個の海流即ち暖寒流の衝突によりて、寒流の載せ來れる氷山の融解することあり、氷山は多少其表面に土砂岩石の如きものを積載し來りて、悉く之を海底に投じ、微力なれども怠らざるによりて、かのセントローレンス河口に存在するが如き、此等の堆積物になれる島を生ずるに至れり。

嘗て大陸の一部分たりしものが、切斷せられて、島嶼となるものあり、或は大陸と何等直接の關係なく、たゞ大陸內部より來れる造山力によりて支配せられ、其外形は全く大陸と關係なき洋島あり、日本の大部分は、水陸確定せる太古より、今日の儘なるが如し。

又地盤漸昇によりて、海底山脈乃至海底の丘岡が、海水面にあらはれて島嶼となることあり。

更に生物の力によりてなれるもの、珊瑚蕉の如きものあり、誠に目に見えぬ小

蟲と云ふべきも、其倦まざる努力は、分泌せる礦物質によりて、遂に島嶼を建造するに至れり。

茲に於てか、かの幾多島嶼につきて、其の地形地質を檢し來りて、其島嶼成生の因を探究し、之を分類比較して、各につきて詳細なる叙述を試むるの、有益にして興味多きを思へども、今は暫く後に讓るの餘儀なきなり。

又此等島嶼の上に生存せる幾多生物と、また過去に生存せる生物とにつきて、其性質特長を研究せば、島嶼間又は大陸と島嶼との間に結ばれたる連鎖ある

レムリア大陸

を知るべし、アフリカの東方マダガスカルを基底として、印度洋中にレムリア（リムリア）大陸の存在を是認するものは、かのモザンビークの一海峽が、大陸と島嶼との生物に、著しき相違ありて、到底之が大陸より分離せるものにあらずとなし、新に大陸を構成せるものなり。

ワレース線

之に反して、馬來群島に於て、ボルネオセレベス間のマカッサル海峽より、ジャバ島の東に於て、バリーロンボック二島に一線を劃して、之を以て學問上のアジア太洋洲の境界となし、命じてワレース線と云へるものは、二小島の間距離近けれども、其生物は著しく異なれるものにして、一はアジアに類し、一は太平洋に類似せりとなせるものなり。

かくの如く島嶼は、島嶼自身の比較研究と、其上に生存する生物の異同によりて、幾多の趣味ある發見あるものなり。

第七篇　雪と人

一古人と雪　三才圖繪に引用する所、論衡云、夏爲露、冬則爲霜、溫則爲雨、寒則爲雪、雨霧凍凝者、皆由地發、不從天降、韓詩外傳云、凡草木花多五出、雪花獨六出、（朱子云地六水之成數、雪者水結爲花、故六出也）と、雪を説明せる文を引用し、更に按冬則日行天之南陲、故北地愈寒也、本朝信越賀奥羽之北國雪多而越州最爲勝、雪積蔽屋棟、出入無便、每秋收貯衣食薪鹽、以待春也、其雪中家却暖也、凡雪降之翌日必暖也、（中略）本朝富士山常有雪、唯一日六月望消而其夜復積。

とあり、富士山降雪のことは如何ならんも、かの雪の凝結の狀を說明し、更に形狀にも及べるは面白し。

さはれ、降雪の時同じからず、また堆積同じからざるも、木の葉ふりしく秋の暮より、はや遠の深山にふり初めて、嶺より麓へ、淡より濃に、次第次第に移り行くかと見れば、春は彌生の頃には、麓の里に萠え出づる、春の若草やう〳〵青うなり行けば、里より峰と、薄うなり行きて、白衣の雪山倏忽として、裝を改むるは之も衣更着にかと面白く、降り行くまゝに、次第にかくれ行く人影の、淡雪門田より消え初むるにつけて、若草の萠え出づるが如く、蝶を追ひ花を尋ねて、谷の小川にむすぶもの、雪の消長は一年の消長なるべく、東海芙蓉峰下に立ちて、巨人が衣裳に心を盡せる樣を見ば、まさに之れ人間の四季なるべし、淡雪深雪のけぢめと、四季の移り行くけぢめとをたぐへ見んは、誠に興あるわざなり、まして、降りくる雪は何等の怪しきふしもなく、古人の蒙昧なるも此間に何等の疑問なく、年毎に時を違へず降り來るのみか、其ふる雪にも年々歲々差別なければ、

三歲の兒も之を弄びて怪まず、初雪山の端におきそめてより、淡雪の消え行くまで、折りにつけての降雪ばかり心を慰むるものはあらざるべく、濁れる空も掃ひ洗はれ、塵埃の汚穢も掩ひつくされ、寒くはあれど空淸く、苦しくあれども慰むる、雪の松、月の雪、枯木に添ふる時ならぬ六花、詩心ある歌人が、いかに詠歌に心を盡しけむ、所も同じからず降りくる時も同じからぬに、まして見ん人の心々の異なれるは、よみ出でし詩歌にても知らるべく、歌にし詩にせざる雪の物語も、また面白く、をかしき事多し、かの謠曲なる鉢木に。

「もと降る雪に道を忘れ、今ふる雪に行き方を失ひ、一所にたゞずみて、袖なる雪を打ち拂ひし給ふ氣色、古歌の心に似たるぞや。

駒とめて袖打ち拂ふ蔭もなし佐野の渡りの雪の夕暮

かやうによみしは大和路や、三輪が崎なる佐野の渡り、

(地)　是は東路の佐野の渡りの雪の暮に、迷ひつかれ給はんより見苦しく候へども、一夜は泊り給へや。

(歌)げに是も旅の宿、假初ながら値遇の緣、一樹の蔭のやどりも此世ならぬ契なり、それは雨の木蔭、是は雪の軒ふりて、うきねながらの草枕、夢より霜や結ぶらむ。とある、苦しくも面白きふしなり。

駿河なる富士の高嶺におく雪の、春夏秋冬に色を改むれども、黒金の土もとくてふ盛夏を閲して、蒼態の依然たる姿、如何に崇高の感を古今に興へけん、屹立東海天、倒扇の如く、また銀甲の如く、純乎として潔なるもの、いかに古人の心を動かし今人の心を移しけん、東湖が卓立東海濱、忠誠尊皇室、と詠せしは、主君水戸德川家の上なれども、其峻烈なる姿は正さに芙蓉の峯にも似たるなり、清少納言が千載の下にも、朽ちぬ頓才を殘したるは、また香爐峯の雪なるべく、心なき禽獸も物思ふからにや、進みかねて逡巡躊躇せしは、雪擁藍關馬不前の古詩ならずや、轗軻不遇をなげき給ひて、谷影深く分け入りし、惟喬親王が、榮ゆる藤に力を奪はれて、うら寂しくもながめける雪の庭に。

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪踏み分けて君を見んとは、とおとづれける多情多感の詩人業平は、今ふる降る雪に消えもせぬ、赤き熱き志をあらはせしなり、又、大沼枕山が。

雪沒弓鞋不可行、　呱々含凍欲無聲、　誰知一笠飄蕭影、　中匿亡讐萬甲兵、

と詠せしは、常盤が三子を伴うて、吹雪の裡にとぢこめられし狀にはあらずや。親を思ひ子を戀ひて、心ならずも後の世に、毀譽褒貶を殘しつゝ、雪に迷ひては立ちとゞまり、行末を思ひ煩ひては思にくるゝ人の心、あはれとも云ふべく、空に知られぬ白雪か、色も香も山櫻かと、疑はれし勿來の關、これは八幡太郎が櫻花に慰めし昔物語、妻を戀ふる心の暗、夫を慕ふ誠心に、纒綿たる情緒、悶えし其末に、麓と嶺に分れける、はかなき妹背の緣、思へば萬は夢なりと、ふる白雪の心も道もふさがりて、行先總て冥々なりしをうたへるは、所は鎌倉鶴岡八幡社前の舞殿、主は靜御前ならずや。

君を思ふの誠心に、忠義の鬼となりにける、四十七士の物語三月三日道もせきまで降る雪を、血染の雪となしてける、水戸の浪士の振舞ひ、げに降る雪と恐し

くはあれど、清き潔き志は、霜雪を凌ぐとも云ふべけれ。

かれは本朝雪の物語にして、これは泰西伊太利の地、カノッサの城門積雪皚々たるの日、露頭洗足、泣いて哀を法王グレゴリオ七世に請へるは、獨逸皇帝ヘンリー七世にはあらずや、カルタゴの名將ハンニバルが、紀元前二世紀の頃、前人未踏の雪のアルプスを越えてより、ナポレオン一世またも之が後を追うて、古今の二快事を殘せり、越えける後は快かりしも、幾尺の積雪を踏破しては、吹雪の風に身を裂くばかりなるに泣き、溪は氷りて鐵の如く、靴痕蹄跡一歩も進みがたく雪崩（ナダレ）は泰山の碎くるがごとく、人馬を擇ばず、惡く驅りて谷底に投せし時、救濟の途絶えて空しく涙を飲みて前進の途に上ぼるものあれば、かくとも知らぬ全軍にとり殘されて、凍れるかいなに力を限り鼓を打てども、絶えなんとする玉の緒の、辛く支へし聲ふり立てゝ、呼べども、谷は千仞の深壑にして峯に及ばず、嶺を拂ふ吹雪の嵐は、天を掠め、地を攘うて、戰士が耳を妨げ、あはれ一將功なりて萬骨遂に谷間の雪に枯れけるも、モスクヴァの火焔全部を舐めつ

盡して、勇みに勇める全勝軍をして顏色なからしめしも、靴は破れ鮮血淋漓たるも、刀は碎けて施すに術なかりしも、雪に踵の血を彩りて、平然として獨立の大業を成せし米國、思へば西も東も、昔も今も、雪の物語は、降る雪のつきぬ限は多かるべし。

二雪と文學　かの簾をかゝげて見し雪も、我が物と思ふて見たる笠の雪も、宮も藁屋も、たがひに見所多き雪なれば、賤もあて人も、歌にし繪にし、もてはやされども、雪の國なる北信濃に生れて、淋しかりし山里に、荒れにし庵を結びて、心細くも世を送りけん俳人一茶の如きは、かの寂寥なる雪の景色をうたへる人なるべし。

草庵　雪の戸や押せば開くと寐てゝ言ふ

病中のていたらく

　　衽なりに吹きこむ雪や枕許

の二句の如きは、遂に高貴の人の解しがたき所、先頃渡邊宮相前藏相たる渡邊

無邊先生と共に、二色評を試みて、以て一茶の句を上下したるあれども、伯爵たり子爵たる二先生の、一言前二句に批評し及ばざりしは、誠にさもあるべし、吾等幸にして賤農の家に生れ、百歳を隔て、幽明境を異にしつゝも、かゝる知己を得たるを喜ぶもの、方丈の茅舍もと妻戸も遣戸もなければ、五尺三尺の蘺荊をたゝて、之を雪上の玉簾にたぐふ、出入いくばの勞力を要することもなく、開閉自在なれども、風烈しければ飛びて旌旗の如く、冬日僅に棒を以つて内より支ふ、土間あり、僅に木屐一對、草鞋一足を置くべく、室内の家財を動かす起つを要せず、土間を上ること一尺、こゝに荒莚を敷きて座となす、座に左右なく又上下なければ、貴賤主客の席を撰ぶを要せず、衣は冬夏各一襲なれば、出るも入るも改むるの要なし、之れ草庵の眞狀なり、されば十二月二十四日故郷に入る、として、

是がまあ終の栖か雪五尺

と、自らも感然の情をなせるが如し。

一　茶

醉着

萬里清江萬里天、一村桑柘一村烟、漁翁醉着無人喚、過午醒來雪滿船、
江雪　韓致元

千山鳥飛絶、萬徑人蹤滅、孤舟蓑笠翁、獨釣寒江雪。
春雪　柳宗元

餘寒無去發花遲、春雪夜來欲積時、信手猶掛三盞酒、醉中獨樂有誰知、
雪後　伊達政宗

晚醉扶節過別村、數家殘雪擁籬根、風前有恨梅千點、溪上無人月一痕、
新古今集　譚知柔

庭の雪に我痕つけて出でつるを訪はれにけりと人や見るらん
宿上毛山家　慈圓

寒雲斷續月如弓、蕭寂孤村未睡中、近有後山狼乳子、一聲震地五更風、
追懷南遊　市河寛齋

中谷寥々人不行、陰雲堆裡宿柴荆、乳狼夜半來尋食、一徑菅茅蹈有聲、　村山佛山

玉田代里

奇寒半夜透衣袍、客夢醒來意鬱陶、草木滿山皆震動、餓狼吼月一聲高、　芭蕉

雪散るや穂屋の芒の刈り殘し
いささらば雪見にころぶ所まで

竹の雪落ちて夜なく雀かな

市人のいで之れ賣らん雪の笠
古道と聞てゆかしき雪野哉　蕪村

風呂入に谷へ下るや雪の笠
いさり火の燒きのこしけん岩の雪　晩翠

馬前の夢の一節

サンベルナアの嶺高く　雪滿山を埋むれば
響は凄しアバランチ　難をしのぎ險を越え　云々

大宮の内にも外にも光るまで
ふれる白雪見れどあかぬかも　大伊家持

ふる雪の白髮までに大君に
仕へ奉れば貴くもあるか　橘諸兄

身の上にかゝらんものを遠からぬ
黑髮やまに降れるしらゆき　源頼政

烏玉の黑髮山に雪ふれば
谷も埋るゝものにぞありける　源俊頼

江天暮雪

長空卷玉花、江洲白浩々、雁影不復見、千崖暮如曉、漁翁寒欲歸、不記巴陵道、坐睡船自流、雲深一簑小、　陳孚

雪中遊山寺

簌々天花落未休、寒梅疎竹共風流、江山一色三千里、酒力消時正倚樓、　高士談

雪で富士が富士にて雪がふじの雪　鬼貫

花を雪に見たる法師や雪の花

白砂のどこが空やら雪の空

又、德富、健次郎氏の作、雪の日に、

『起き出で見れば、滿天滿地の雪、午前は粉雪粉々霏々、午後は綿雪片々飄々、終日間斷なく降りくらす。

障子を開けば、玉屑霏々亂れて斜に飛び、後山も雪の爲におぼろなり、風大に到れば、積りし雪また亂れ立つて走る、午後はいよ〳〵降りしきりて、馬車も通はずなりぬ、積る雪の重量に、何の木にや、ぽきと折るゝ音するもの兩三度。

滿天滿地一白の中に、獨り前川のみ鼠色にして黑く、鴎數十羽來りて泅ぎつるあり、時々其二三羽、水を起つて、十分に翼を擴げ、風雪に向ひて飛ばんとすれども、吹きやられ吹きやられして、空しく水に下りぬ。

盡日霏々漠々、天地雪に埋れ、人風雪に閉ぢられ、斯くて降りながら夜に入りぬ。

夜十時燈を攜りて外を覗へば、飛雪紛々たり。』

雪のあくる日

『夜來の風雪やみ、今日は玉の如き霽となりぬ。

日は高く昇りて雪を蒸し、檐頭の雪先づ解けて、點滴雨の如く落ちて小川をなし、泡立ちて聞き舟の如く流れ行く、障子閉せば、滴々點々の影連りに障子に落ちて、しば〳〵雨と疑ひ、障子開けば、きら〳〵と光りて青空より眞珠の降るに似たり、雪に伏したる莢竹桃、少し融けて壓力の溜らぐと共に、殘雪を刎ね落して起きかへる。

富士は麓まで綿もて包める樣にふくよかに、日先づさして嶽頂に水蒸氣煙の如く立上る、相豆の連山は一白にして、鮮かなること驚く可く、五六里も北方に歩み寄れる樣なり。』

又、古詩に越後の大雪をよめるものあり。

凜冽寒威欲逼身、　春來何處好知春、　雪山隔斷中街盡、　對面家如相與秦、

とあるは、深雪街を埋めて兩側通じがたく、片側軒下を通じて僅に往來するの狀を明かに詠せしものなり。

第八篇　雨と人、（霧、霞）

古人と雨

一、古人と雨　理や日本なれば照りもせにさりとては又天が下とて、雨を祈れる人あれば、時により過ぐれば、民に憂あり、八大龍王雨やめ給へと祈れるもあり、古も今もかはらぬ、水旱雨者の災を除かんとなり、治水に心を盡せし人なきにあらぬも、古今共に治水の事業不充分なる時、汎濫せる河水が、如何に暴威を逞うしけむ、霖雨久しくしてやまず、沛然覆盆の强雨來るの日、誰か實朝と同樣の感をなさゞる、かの白河の水は、至尊の御志にもそむけりときくを、邊境の地が蒙りし災害知るべきなり、されども旱魃永くして雲を見ざる久しき時、生物涸死し、人畜の害を受くるまた幾何ぞや。

かの根本的治水策によりて、よく水源涵養の策を講ずるものなきにあらざるも、かの春雨五月雨の多雨を如何ともしがたく、夏日の旱をまた如何ともしがたく、遂に仁慈なる治政者が、時によりて祈禱をなし、よく降らしめまたよくやましむるのみ、之を今日の文明よりするも、また施すの術なきを見れば、古人はたゞ寛仁大度の天神に訴へて、其志を動かせるのみなれども、之を智ある今人より見んか、たゞ一笑に附せらるゝのみ、されば古人も多くは水旱を以て天となして、また疑はざりしなり。

所により時により、降雨の量も時間も、大差あるあれど、常に吾人と交渉を絶たざる雨なれば、人類に及ぼせる雨の影響なしと云ふべからず、かの五月雨ながくやむ時なき日、疾病之に伴うて起り、濕氣多き所徵また生じ易く、物腐敗し易く、人心倦怠し疲勞し、氣力なく體力減退し、生物悉く災を蒙らざるなし、雷電また轟々閃々として樹をさき家を燒き、沛雨田畑を損し、人畜を害し、損害少からぬも一面汚物洗滌の功も大なるものあり、旱天久しく人心却て怠るの日、清雨一度來りて地を洗ひ、人心を新にし、生また蘇生の思あり、雨の功は其罪を償う

て餘あるものと云ふべし。

二、雨と文學

春雨や蹤をのばす草の道　芭蕉
春雨や人住みて畑壁をもる　蕪村
笠とりて跡ちからなや春の雨　鬼貫
山里も錢湯涌きて春の雨　一茶
笠寺や洩らぬ窟も春の雨　芭蕉
春雨やものかたり行く簑と笠　蕪村
春雨のけうばかりとて降りにけり　鬼貫

興謝野寛氏の雨に

『濁りたる眞夏の雨の　みづけぶり市を掩へり
誰か知る全神經、　蟻の感ほてるまゝに
身を投げて大地に浸り、　木臭き黑き憂の　琴をきく、かゝる樂しさ。』

出郭舟行避雨樹下　高青邱

一片春雲雨滿川、漁簑欲借苦無緣、多情水廟門前樹、遮我孤舟半日眠。

五月雨にかくれぬものや瀬田の橋　芭蕉
夕立や家をめぐりて家鶏なく　其角
梅雨の中八靜かなり法華堂　子規
夕立のあとの匂や三保の松　芭蕉
秋雨や水底の草ふみわたる　蕪村
秋ふけて小雨そぼふる隅田川　橘千蔭
たが墨がきのすさびなるらむ

夜聞雨聲憶故園花　高青邱

帝城春雨送春殘、夜雨秋聽客枕寒　莫入鄉園使花落、一枝留待我歸看、

旅人の眞菅の笠や朽ぬらむ　藤原公實
黑髪山の五月雨の頃

地と人

里の火を含みて雨の若葉かな　大島蓼太

五月雨のふり残してや光堂　芭蕉

時雨の日　徳富蘆花

『今日は時雨の日なり、はら〳〵と降り出づるかと思へば止み、止みしと思へば、また思出でたる樣に降り出す、宿の女等幾度か乾物の出し入れに迷ふ、自然も冬に入らんとして、心騷ぎしにやあらむ、「忙しう世の思はるゝ時雨哉」と古人の句妙なる哉。日は薄絹につゝまれたる樣に光薄く、山茫と打けぶり、落葉勝なる木々は打しめり、空氣はうつとりとして重し、恰も非陰に似たり、たゞ寂しきのみ。』

三、霧　北の方を流る、メキシコ灣流は、英國のためには無上の恩人なれども、かの濕り勝ちなる英國の空氣も亦この影響なるべし、ロンドンの霧、常に洋行者の土産談に上る、一夜市中を散策して遂に旅舍を失す、捜すに術なく拂曉を待つ、天明霧散自から旅宿の前に停れるを知れりと云ふ、天氣晴朗なること少く、陰然たる英國に於て、其國民性が、佛蘭の爽快なる空氣中に養はれしものと同じからざるは詮なき所にして、洒々落々の態なく、一見人づきあしく思はる態度も此天候に養はれたるためにして、一面堅忍持久の民なるも、美術工藝の發達なく、比較的實用向の工業の盛んなるも皆これが爲なるべし。

黒潮の流は北して、三陸の東方北海道の南方に於て、北より來れる寒流と衝突し、また霧を生ずる少からず、日露の役、彼の軍艦之に乘じて日本船舶を襲擊したるは、實に霧の利用なり、航海の船舶が時々衝突せるは、霧の災なり、燈臺船艦の霧笛を用ふるは、災害を免れんためなり、函館方に於て、南風吹くの日忽ち陰雲につゝまるゝも之れなり。

北米の東岸には、暖寒流の衝突するあたり、時々氷山の北より來るものあり、また船舶に及ぼす害少からず。

霧、曙や霧にうづまく鐘の聲　芭蕉

霧時雨富士を見ぬ日ぞ面白き

地と人

朝霧や村千軒の市の音　蕪村

朝霧や蕎にかく夢の人通り　鬼貫

宇治川や朝ぎり立ちて富士見山　一茶

霧の中に何やら見ゆる水車

夕ぎりや馬の覺えし橋の空

有明や淺間のきりが腦を這ふ　樵中納言定頼

朝ぼらけ宇治の川霧たえ〳〵に

あらはれわたる瀬々のあじろ木

四、霞

かすみやら花の雲やら煙やら　芭蕉

あの桃も流れこよ〳〵春霞　一茶

遠う來る鐘のあゆみや春霞　鬼貫

草かすみ水に聲なき日暮かな　蕪村

和歌のあととふや出雲の八重霞　芭蕉

日光小倉曉色

雨破春山欲曙天、紅霞飜影落前川、日升初識非霜雪、花樹高低巖谷邊、　公慶

同

小倉山色似皇州、不險不弟沿水流、花氣氤氳天未曙、紅霞一片入雙眸、　玄堂

五、露

烏羽玉の黑髮山を朝越えて　人丸

木の下つゆにぬれにけるかな

なき渡る雁の涙や落つらん　讀人不知

物思ふ宿の萩の上のつゆ

白露の淋しき味をわするゝな　芭蕉

白つゆや茨の刺に一つづゝ　蕪村

つゆ散るや各あすは御用心　一茶

第九篇　四季と人

門田の淡雪消え初めてより、吹く風、ふる雨、いづれも皆春のものにして野べの嫩草雪を割り、谷の氷のとけて、流るゝ折、蝴蝶軟き羽根打ちふりて、まだ馴れもせぬ野と山に、行方定めずさまよへるに、野中の清水沸々と湧き出でゝ、御空に鳥の囀あれば、み底に水のさゝやきあり、今日はなたれて小羊の、叢さして小躍りしつゝ走るもあれば、蝶を追ひ行く若駒の、足を空にするあり、ふる春雨は白雨なれど、いかに染めけん梢には、同じ色なる緑あり、野べ吹く風は輕けれど、毛物も蝶も小雲雀も、促されてか春風にふわりふわりと立ち舞ひぬ。

春雨に色に香添へし梅の花、散りにしあとは淋しきも、霞たなびく外山には、花の香濃き春風吹きぬ、深山の奥も今日ばかりは、春來にけりと櫻花、門にかざして、歌ふなり、谷をへだてし鶯の聲はがらかに聞ゆるあたり、草葺き屋根の峯をつたうて横にたなびく炊煙も面白く、宮も藥屋も春となりぬ。

櫻散り山吹落ちて夏は來ぬ、脆かりし九十の春光、軟かなる春風のきぬ、はや脱き棄てゝ、滴る緑色濃きあたり、夏は來ぬ、黄金色なす麥の穂も、苅りつくされて今はたゞ、水田の蛙、所得がほなり、御空の雷怒れども、春に醉ひたる村人は、心靜かに眠るなり、短き夜のあけ易くて、あけぬるあしたも朧なり、夕立すぎし木の間より、蟬の音洩れて、大牛の心靜かに眠るなり。

あしたの風は涼しくて、夕の草に露ふかし、豆の葉のつゆ稲のつゆ、白露なれどはや野べを、黄色の野べと染め初めぬ、はや秋來ぬと木葉散り、一葉空に入りて飄々たる時、蟲聲唧々として、聲に悲愁の溢るゝは、榮華急轉の叫ならん、蟋蟀ないて夜は靜かに、小男鹿啼いて荒涼の野は寂たり寞たり。

怒濤巖をくだいて空に躍り、枯風斜に森を吹きて、鴉聲寒く、月影は氷の如く、大地は鐵の如し、氷れる野べを吹く風は氷れる風、氷れる風は月を磨きて鏡の如く、玲瓏透徹なれども冷かに、氷れる空にかゝりぬ、冬なればなり。

あはれ折々に移り行く四季の變化、霞み初めける日より、年のくるゝまで、誠に

面白くまた幻妙なりと云ふべし、年毎に移り行くさまは同じけれども、此の年月を送り明かす、吾等人生には、實に少からぬ刺戟を與ふるものなり、一歳の移り變りは、恰も人生の幼老の移り行くにも似て、年少時代が春ならば、冬に比すべきは老餘の人なるべし、生れて數年の間は、春霞する日なるべく、拾數年に及びて、人生の春終れば、思慮修養次第に堅實なる青年は來るなり、恰も深綠の夏なるべし、而も事志と違ふこと多かりし青年も、はやく壯年に及びて、其業大成に近づかんとするは、尙秋が收獲の時なるにも似たり。

之を氣温の上より見んか、春と秋とは最も佳良なるものにして春の如き少年は愛すべく、寵すべきものにして、壯年は大業なり修養なり、秋の時が重要視せらるゝ如く、尊敬すべき時なり、一は春秋に富める少年なる故に、一は人生の目的に到達したるが故にして、人生と氣候の類似も亦面白しと云ふべし。

かゝる類似は、長年月間に亘りて、明かに證し得べきものにして、吾人の深き興味を以て觀察すべきものにして、春秋は少壯二時代に比すべく、共に温和なるものなるも、夏冬は熱寒共に峻酷なり、青年の感情に支配せられ、老年の僻み根性あると似たり、かくも移りゆく人の心身に、四季の轉變の幻妙なる勢力を加へて、人類が生み出したる感情思索は、幾多の形式色彩によりて世上の發表せらるゝものなれども、特に文藝の一事に至りては、著しき影響を被るべけれど、其間の關係にめて複雜なるものなれば、こゝにはたゞ、四季の變化を詩にし歌にし、又文にしたる一部分をあげて、本項を終へんとす。

春。與謝野寛氏作『春は來ぬ』に

隣の垣のあをやなぎ、　隣の軒のつばくらめ、
春こそ來ぬれ隣まで、　やせて角あるおとがひを、
白き兩手にかい支ふ。

又『行く春』に

ほろほろと櫻散る、　水のほとりを行くをみな、
裾あし白しうなだれて、　ほろほろと櫻散る、

たそがれの　隅田堤の悲しさよ。

山家春興　光明天皇

桃花流水洞中天、不記煙霞多少年、滿目風光塵世外、等閑逢着是神仙、

春遲　室直清

楊柳未垂花未紅、家々簾幙掩東風、春歸江上無尋處、只在青々草色中、

惜春　大槻磐溪

花落花開不管春、名奔利走老風塵、一杯且向東君酹、愛惜今宵有幾人、

早春　韓退之

天街小雨潤如酥、草色遙見近却無、最是一年春好處、絶勝烟柳滿皇都、

江南春　杜牧

千里鶯啼綠映紅、水村山郭酒旗風、南朝四百八十寺、多少樓臺烟雨中、

春宵　蘇東坡

春宵一刻値千金、花有清香月有陰、歌管樓臺聲寂々、鞦韆院落月沈々、

夏。

春夜洛城聞笛　李太白

誰家玉笛暗飛聲、散入春風滿洛城、此夜曲中聞折柳、何人不起故園情、

日くれ〳〵春や昔の思かな　蕪村

春の夕たえなんとする香をつぐ　大江千里

鶯の谷より出づる聲なくば　紀貫之

春くることをたれか知らまし

春日野の若菜つみにや白妙の　大友黒主

袖ふりはへて人の行くらむ

春雨のふるは涙かさくら花　鬼貫

ちるを惜しまぬ人しなければ

春風や三保の松原清見寺　一茶

うら晴て障子も白し春日影

身一つをひたと苦になる暑かな

信濃路の山が荷になる暑かな　壬生忠岑

くるるかとみればあけぬる夏の夜を　深養父

あかずとやなく山郭公

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを

雲のいづこに月やどるらむ

夏の夜　島崎藤村

君と遊ばん夏の夜の、
短き夢は結ばずも、
雲となりまた雨となる、
星の光をかぞへ見よ、
夢かうつゝか天の川、
ひゞきもすみてこひわたる、
夏日頻雨

青葉の影の下すゞみ、
せめて今宵は歌へかし、
盡の愁はたえずとも、
樂のかず夜は盡きじ、
星にかりねの織姫の、
梭の遠音をきかめやも。

楊誠齋

一番暑雨一番凉、眞箇令人愛日長、隔水風來知有意、爲吹十里稻花香。

夏(自然と人生)

梅雨晴れて、まさしく夏となりぬ。

障子開き、簾を下ろして坐すれば、簾外山青く、白衣の人往來す、富士も夏衣を着けぬ、碧の衣すがすがしく、頭には僅かに二三條の雪を冠れり、青疊敷く相模灘の上を習々として渡り來る風の凉しきを聞かずや。

又

今日初めて蜩の聲を後山に聞きぬ、一聲さやかにして、銀鈴をふれる如し、白日山に入り、凉は夕と共に生ず、外に出づれば、川に釣る人あり、談笑の聲あり、笛聲あり、花火を揚ぐる子供あり、夏の季は始りぬ。

秋日小梅邸樓上　藤田東湖

高樓臨水水連空、驟嶽常山指顧中、誰識疎簾半垂處、三秋風物老英雄。

秋のうた　藤村

秋はきぬ、秋はきぬ、　風のきて彈く琴の音の、
一葉は花はつゆありて、　自然の酒とかはりけり、
青き葡萄は紫の、　皆夕霜のおきどころ、
秋はきぬ、秋はきぬ、　盃にこそつぐべけれ、
おくれ先立つ秋草も、
笑の酒を悲みの、　誰かは秋に醉はざらめ
秋は來ぬ、秋はきぬ、
草木も紅葉するものを、　君笛を吹けわれはうたはん。
智惠ありがほのさみしさに、

日光山鳴蟲紅楓　眞圓

青女染成千樹楓、斜暉映處火如烘、滿山錦繡誰爭富、何用晉時稱石崇、
さま〴〵の哀ありつる山里を　山家集
人につたへて秋のくれける、

紅葉青山水急流　土井晩翠

桐の一葉をさきだて、　浮世の空に音づれし、
秋は深くもなりにけり、
虫の音細く秋の野を、　初めし昨日の露霜や、
萩が花ずりうつろへば、　移る錦は夕端山、
思入る日に啼く鹿の、　紅葉織りなす床の上。
谷間は早くくれ行けど、　入日の名殘しばとめて、
にほふ尾上の夕紅葉、　花のあるじにあらねども、
山ふところの白雲に、　契るやいかに夜半の宿。（下略）

秋の夜や古き書よむ奈良法師　蕪村
野路の秋我がうしろより人やくる
秋風のふたたび倒す障子かな、
親と云ふ字を知りてから夜寒かな　一茶

から樽をまたふりて見る夜寒かな　敏行

秋風やむしり残りの赤い花

秋の夜の明るもしらずなく虫は　在原元方

わがごと物や悲しかるらん

待つ人にあらぬものから初雁の

けさなく聲のめづらしきかな　忠岑

山里は秋こそことにわびしけれ

鹿のなくねに目をさましつゝ

枯枝に烏とまりけり秋の暮　芭蕉

初冬　蘇東坡

荷盡已無聲雨蓋、菊殘猶有傲霜枝、一年好景君須記、正是橙黃橘綠時。

冬日山居　宋琬

夾岸長楊接翠微、亂流高下濕柴扉、空山十月無氷雪、紅葉堆中蛺蝶飛。

いつも見るものとは違ふ冬の月　鬼貫

水よりも氷の月はうるみあり

蕭條として石に火を見る枯野かな　蕪村

真直に道あらはれて枯野かな

木枯や岩に裂け行く水の聲

太刀疵を一つばなしや冬籠　一茶

夕燒や唐紅の初氷

行く舟やいづこの浦に年取らん　芭蕉

須磨の蜑の年とふものや柴一把

埋火も消ゆる汨の烹ゆる音

第十篇　空と人

そらは地にはあらざるべし、空氣は地にはあらざるべし、さはれ渾圓球の外皮

空中船

月と文學

として、空氣が吾等を掩へるからは、地にあらじとて棄つべきにはあらざるべし、空とぶ鳥のたぐひとしいへば、眞僞を疑はれし、天狗仙人の類として、また人間の顧みるものなかりしも、今や空行く雲と徂徠する氣球あれば、天つ日さして飛ぶ船もあるなれば、地にあらじとて、棄つべきにあらず、水や空、空や水、水の上行く船もあり、大空かける船もあり、かの海原が行人の一大交通路たると共に、かの大空もまた交通の路たらんとすれば、御空の月に嘯くのみかは、又雲路を走る星辰に、熱き涙を濺ぐのみならず、見渡す限り涯際なき、虛空深くも探ね入り、到らぬ隈なき探究を遂ぐべきは新らしき時代の要求なるべきも、今は暫く後日の樂となして、うたはれし詩歌の中より、月と星との面白きふし取り出でゝ、人と空との稿にかへん。

月と文學、霞にくゝる春の月、花にかくれて朧なり、綠葉照らす夏の月、水に落ちては綠をなし、すみ渡りたる大空に、獨りがに照る秋の月、見る人々の心からにや、色々の色も添ふらむ、氷りてすめる冬の月、詠むる人のなきをばかこつらむ春の月夏の月、秋と冬との宵々に、いかに色をば添ふるらむ、泣きてながむる月の影、御空はいかに澄めるとも、憂からにや曇るらむ、朧に照らす春の月、花霞する眞夜中も、三杯のうま酒吾醉はば、いかに月影たのしからむ、秋の御空の月影を、曇なきものと云へば、罪なき人の心にもたぐへん、冬の月をばつれなしとて、世に涙なき女とも言はん、あはれ面白の月影を、樂しとすさぶ笛の音に、悲しと妻琴かきならす、同じ妹背のあるものを、まゝならぬ世と思ひつゝ、いでなき人や、今の世の人々が、いかに同じ月をばうたひけんなどと、古き新らしき文とうです

配所の月を見て　菅公

海ならず漂ふ水の底までも清き心は月ぞ照さん

去年今夜侍清涼、秋思詩篇獨斷腸、恩賜御衣今在此、捧持毎日拜餘香

なかなかに心づくしの浮雲も　本居春庭

光を添ふる有明の月

あをうな原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出でし月かも

安倍仲麿

把酒問月

李太白

青天有月來幾時、我今停杯一問之、人攀明月不可得、月行却與人相隨、
皎如飛鏡臨丹闕、綠煙滅盡清輝發、但見宵從海上來、寧知曉向雲間沒、
白兎搗藥秋復春、嫦娥孤棲與誰隣、今人不見古時月、今月曾經照古人、
古人今人若流水、共看明月皆如此、唯願當歌對酒時、月光長照金尊裡。

哭仲麿

李白

日本晁卿辭帝都、征帆一片繞蓬壺、明月不歸沈碧海、白雲秋色滿蒼梧。

島崎藤村

月光五首(中)　其一

さなきだに露したゝるゝ、
老いずの夢にたとふべき、
月の光のさし入りて、
深き樹蔭にたゞすめば、
夜の思に醉ふものを、
林のさまぞ靜かなる。

緑を洗ふ白雨の、
清みたる酒の香に通ふ、
木下に夢を見よととてか、
晴さに沈む樹々の葉の、
蔓束なくも樹の蔭の、
緑に煙る夜の月の、
光もいとゞ花やかに、
耳をたつればなつかしや、
鳴く音をもらす子規。
はるかに聞けば絶々に、
げにやいみじき其聲は、
板戸をもるゝ忍び音の、
響をあげよ谷あひに、

過ぎにしあとの梢には、
雫流れ　にはふらん。
林の夜の靜けさは、
影のくらきにあればなり、
闇の深きに沈めるは、
深き木枝をもれ出で
さし入る影のあればなり、
かなたこなたに木がくれて、
流れて響く谷の水、
いとしめやかにつま琴の、
糸のしらべに通ふらん。
むせびて下る河水や、

響をあげよ月影に、　しらべをつくる河水や、
よしや林のふかくして、　眼には流れの見えずとも、
月の光にさそはれて、　夜の思を送れその琴。』

宗鑑

笠をきば雨にも出でよ夜半の月

上杉謙信

天正二年九月十三夜

霜滿軍營秋氣清、數行過雁月三更、越山併得能州景、遮莫家鄕憶遠征、

平時忠妻

月の十六日播州明石浦にて

雲の上に見しにかはらぬ月影の澄むにつけても物ぞ悲しき

平時忠

眺れば同じ袂に宿りけり月よ雲井の物語せよ

平忠盛

鳥羽院の明石の浦の景色を奏す

方以智

有明の月も明石の浦風に浪ばかりこそよると見えしか

看月

一片鍾山月、那從嶺外看、昔嘗臨北闕、今獨照南冠、萬里天難問、三更影易寒、夢中兒女路、莫憶舊長安、

徳大寺實定

近衛河原の大宮にて

淺茅が原とぞなりにける、
古き都を來て見れば、
秋風のみぞ身にはしむ、
月の光は隈なくて、

左馬頭行盛

福原の新都にて

君すめばこゝも雲井の月なれど尙戀しきは都なりけり
岩端にこゝにもひとり月の客

去來

あの月や昔濱名のはしの月

鬼貫

時鳥なきつる方をながむれば

實定

たゞ有明の月ぞ殘れる

塙保己一

花ならば探りても見ん今日の月

保己一妻

名月は座頭の妻のなくよかな

杜子美

新月

光細弦欲上、影斜輪未安、微昇古塞外、已隱暮雲端　河漢不改色、關山空自寒、庭前有白露、暗滿菊花團。　藤原家隆

明けば又秋の最中も過ぎぬべし
傾く月のをしきのみかは　土御門院御製

秋の色を送り迎へて雲の上になれにし月も物わすれすな
世のうさに一方ならずうかれゆく　西行法師

心定めよ秋の夜の月

池水に底清くすむ月影は
波に氷をしきわたすかな

月を見て明石の浦を出る舟は
波のよるとも思はざるらむ　芭蕉

大井川浪にちりなし夏の月

夏の月御油より出でゝ赤阪や　同人

蚊帳を出でゝ又障子あり夏の月　支考

名月や縁の弓を山のはに　鬼貫

深き山に住みける月を見ざりせば　西行

思出もなき我身ならまし

物思ふて詠むるころの月の色に

いかばかりなるあはれ知るらむ

うれしとやまつ人毎に思ふらむ

山のは出ずる有明のつき

明月幾回滿　范梈

明月幾回滿、待君君未歸、中庭歩芳草、蝴蝶上人衣、誰念同袍者、閑居興願違、

雲をりをり人を休むる月見かな　芭蕉

慕はるゝ心や行くと山の端に　　西行
　しばしな入りて秋の夜の月

有明のおもひてあれや横雲の
　たゞよはれつる東雲の空

都にて月をあはれと思ひしは
　數にもあらぬすさみなりけり

春も稍景色整ふ月と梅　　芭蕉

松島や水を衣裝に夏の月　　同人

あすみちて明日かける月の今日こそな　　鬼貫

小むしろや茶釜の中の夏の月　　一茶

打水に宿り給ふぞ夏の月　　蕪村

女俱して内裏拜まんおぼろ月　　蕪村

瀟湘の鴈の涙やおぼろづき　　蕪村

十四夜月

天意將圓夜、人心待滿時、己知千里共、猶訝一分虧、　　范仲淹

三日月の頃より待ちし今宵かな　　芭蕉

月はなし日をそのまゝの今宵かな　　紹巴

住み詫びて都の月を出でしかど　　阿佛尼

うき身はなれぬ有明のつき
たび人の同じ道にや出でつらむ　　同人

笠うちきたる有明の月　　三條天皇御製

心にもあらでこの世にながらへば
　こひしかるべき夜半の月かな　　御堂關白道長

此世をば我が世とぞ思ふ望月の
　かけたることもなしと思へば

秋の月人の國まで光りけり　鬼貫
月をとて暫く雲のちぎれ〳〵　同人
夕月よ小倉の山になく鹿の　紀貫之
　聲の内にや秋やきぬらむ

藍色の海の上なりすまの月　子規
山里は汁の中まで明月ぞ　一茶
名月をとつてくれろとなく子かな　一茶
小言いふ相手もあらば今日の月　一茶
盃に月をくだくやよもすがら　蕪村
庵の月主をとへば芋堀に　同人
名月やうさぎの渡る諏訪の海　蕪村

七月十五夜公賞月於内園尋命待臣上中元賞月之詩聽命七月朔移於礫川邸舍）　藤田東湖

三秋此夕始團々、　想像清筵興方酣、　一輪飛鏡萬家看、
　十三夜　東湖
屏跡連句礫水頭、　悲風滿月動高秋、　秋闌桂樹花方老、　霜冷草蟲聲更幽、
雙袖空濺憂國淚、　一樽何問繼華遊、　中宵强向天涯坐、　無限清光照旅愁、

清瀧の浪に洗ふや夏の月　芭蕉
名月や畳の上に松のかげ　同人
名月の御名代かよ白兎　一茶
久方の月の桂も折るばかり　菅公母
　家の風をも吹かせてしがな
我袖の涙にやどる影とだに　新田義貞
　知らで雲井の月やすむらむ
曇りなき心の月の磨がだ　僧月照
　沖の波間にやがて入りぬる

曇りなき月を見るにも思ふかな　吉村重卿

明日は屍の上にてるやと

はことりて夕越しれば秋山の　伴林光平

もみぢの木間月ぞさらめく

今日もまた知られぬ露の命もて　久阪通武

千年もてらす月をみるかな

大谷秋月　李邦彦

皎月涵秋水、明珠一顆圓、驪龍欲相戲、竟夜不成眠、

大谷秋月　任守幹

大壑秋水爭、長川霄月新、君看空色妙、贅微而無塵、

大谷秋月　秀英

綠水抱村落古流、泉壑日夜未嘗休、冷懷豈時洞庭月、滿目秋光大谷秋、

將赴金陵始出閶門夜泊　二首　高青邱

鳥啼霜月夜寥々、回首離城尙未遙、正是思家起頭夜、遠鐘孤棹宿楓橋、

煙月籠沙客未眠、歌聲燈火酒家前、如何纔出閶門宿、已似秦淮夜泊船、　東湖

月のあかかりける夜

板庇もりくる月を見つゝをれば軒端の萩に秋風ぞ吹く　東湖

水上月

隈もなくすみだの川の渡守棹の雫も月となりける　高青邱

涼夜

一聲遠笛數聲砧、月滿江城夜正深、坐憶胡牀愛涼思、空階移盡桂花陰　佐久間象山

ペルリに代りて戲によめる

武藏の海差出る月は天飛ぶやカリフオルニアに殘る月かも

二、星と文學　滿天の星宿其數何千萬なるを知らず、されども地球と相隔つること遠く、光輝極めて明かならず、一は大陸に於て、星を詠せるものなき影響にて、詩歌多からず。

星月夜の戻りにはどの橋越えん星月夜　一茶

七夕祭　星待や亀も涼いうしろ付　同人

新潟や翌待宵の星むかへ　同人

田の水の湯と成つて星の逢ふ夜かな　鬼貫

星も嘯空をどこちに此の夕　同人

地にわらば薄や星のみだれ髪　同人

七草や露のさかりを星の花　同人

明星篇　李夢陽

明星出地二丈高、天門沈々魚鈴動、沙隄露下玉珂寒、直虚雞唱金蓮重、

千門萬戸曉聲發、明星漸高河漸沒、爍爛疑侵翔鳳樓、依稀故抱飛龍闕、

鳳樓龍闕帶厨城、翠輦朱衣夜々行、黄昏競奏催花宴、天明猶聽打毬聲、

闕煙桂花輝如日、明星迢々照不人、日子池頭青草生、長信宮中紫苔集、

草色苦香秋復春、此日乘槎若問津、明星曉落宵還見、白髮黄金愁殺人。

七夕　星あひの中や絶えなん立田川　芭蕉

合歡の木の葉ごしもいとへ星の影

高水にはしも旅ねや岩の上　一茶

嫁星のお顔をかくす板かな

若々し星は今年も妻通ひ

星様の咄き給ふけしきかな

七夕　誰が願星の一葉の吹き散るは　一茶

七日の夜只の星さへ見られけり

鍬星にいで披露せん稲の花

夕の星天地有情

ちぎれちぎれの雲迷ふ、　夕の空に星一つ、　土井晩翠

光はいまだ淺けれど、　思深しや天の海、

嗚呼カルデアに牧人の、　なれを見しより四千年、

光はとはに若うして、
またたく光露帶びて、
つかれ爭ひわづらひに、

流星

門に立出でたゞひとり、
夕の空をながむれば、
何をかこひし世の人に、

七夕

今宵御空の白浪に、
安の河原に舟うけて、
風かぐはしく吹き匂ふ、
涙は顏をうるはして、
かしこにかしこに、

世はかくまでに老いしかな。
今はた泣くか人のため、
我世の事は遠ければ。』

島崎藤村

人待ち顏のさみしさに、
雲の宿もすてはてゝ、
流れと落つる星一つ。

楫の音すなりひこ星の、
今しこぐらし、
花濃き岸にたづさはり、
老をし知らぬ夢のごと、
楫の音きこゆ。

人のすなるを星を見て、
水影草のうちなびく、
再び會はぬこひ妻に、
また色青き草麥の、
燃えては熱き紅唇(クチビル)の、
かしこにかしこに、
人のすなるを星も見て、
川聲さやけしおりたちて、
こひの泉を打ちむすび、
乾くまもなき染紙を、
生命(イノチ)の門をかけ出でゝ、
かしこにかしこに、
人のすなるを星も見て、

こひつくすらん此の夕。
川瀨を見れは一歲に、
今し逢ふらし、
畑のうちに艷れふし、
互にふるゝ夢のごと、
ふれる袖見ゆ。
こひつくすらん此の夕。
天より深く湧き出づる、
今しのむらし。
落つる涙にけがしては、
こひに朽ぬる夢のごと、
渡るひこぼし。
こひつくすらん此の夕。』

銀河

天の河原をながむれば、
遠き昔の夢のあと、
空の泉を世の人の、
天の河原はかれはてゝ、
響をあげよ織姫よ、
星のやどりの今ははた、
あゝひこぼしも織姫も、
夏の夕をかたるべき、
星の力は衰へて、
こゝに千歳を過ぎにけり。
汲むにまかせて湧き出でゝ、
水はいづこにうせつらむ。
緑の空はかばらねど、
いづこに梭の音をきかん。
今はむなしく老い朽ちて、
み空に若き星もなし

趣味の地理

地と人

終

明治四拾五年七月廿一日印刷
明治四拾五年七月廿四日發行

（趣味の地理、地と人奥附）
定價金八拾錢

著作者　五味金平

發行者　東京市日本橋區檜物町廿六番地　江藤邦松

印刷者　東京市京橋區弓町廿四番地　金子久太郎

印刷所　東京市京橋區弓町廿四番地　三協印刷株式會社

著作權所有

發行所　東京市日本橋區檜物町廿六番地　振替東京二三〇番　弘學館書店

334
198

4

9.3.13

4m

774
178

Ⓜ

202546-000-3

334-198

地と人

五味　金平／著

M45

EDE-0079